不登校対策推進計画（全体構想）

不登校対する基本的考え方

【強い認識を持つ】
不登校とならないための魅力ある学校づくりに取り組む

【危機意識を持つ】
不登校は、どの学校でも、どの子にも起こりうる

【協力意識を持つ】
不登校生徒への支援は担任一人が抱え込まない。プロジェクトチームを組織し取り組む

不登校対策委員会、生徒指導部会

教育委員会への報告

関係機関との連携

不登校対策マニュアル

サポート会議
・状況確認　・対応策の検討

全職員
・指導方針の理解・実践

適応指導教室
青少年育成センタ

プロジェクトチーム
SC 含む

SSW

不登校生徒・保護者への支援

魅力ある学校づくり

① 「心の居場所」「絆づくりの場」としての学校
・生徒が自己の存在感を実感し、精神的な充実が得られる「心の居場所」、生徒が社会性を身に付ける「絆づくりの場」として魅力ある学校を目指す。

② 発達段階に応じたきめ細かい配慮
・中学校に不安を感じて不登校生になることすることから、小中連携を一層推進する。中学校体験入学やオリエンテーション等により中学校入学時の不安を解消する。

③ 学ぶ意欲を育む指導の充実
・体験活動等を通して、生徒が自らの生き方や将来に対する夢や目的意識について考えるなどのきっかけを与える取組を行う。

④ 習熟度別の指導や基礎学力の定着に向けたきめ細かい教科指導の実施
・学習に不安をかかえ不登校のきっかけとなることもある。生徒の理解の状況や習熟の程度に応じた「分かる授業」の実施、補充指導の充実等を図る。

⑤ 学級活動、生徒会活動、学校行事等の特別活動の充実
・生徒が学校生活の基盤となる人間関係を形成し、また、学校における居場所づくりができるよう、特別活動の充実を図る。

⑥ 安心して通うことができる学校の実現
・いじめや暴力行為等を許さない学級づくりを行うとともに、問題行動へは毅然と対処する。教職員による体罰等の人権侵害は絶対に行ってはならない。

⑦ 学校と社会のつながりを強めた開かれた学校づくり
・地域と連携し、生徒が社会との結び付きを強めるような様々な体験活動を実施しする。

不登校未然防止

全ての教職員で、「福岡アクション３」における「ステージ１」の取組を実践し、不登校の未然防止に努める。

初　期　の　対　応

状　況
・家庭に連絡をとると、登校を渋る。
・休み明けによく休む。欠席が２，３日続く。

登校刺激
本人にとって「分かってもらっている」という安心感が持てるように支援し、その上で登校刺激をする。

〈情緒混乱型〉
・「がんばって」「待ってるよ」といった励ましはかえって本人を追いつめ負担を感じさせる。
・本人が行ってみようという気持ちが出てくるまで少しずつ誘う、迎えに行くなどゆっくり対応する。

〈怠学傾向〉
・本人を責めることなく励ましながら刺激を与える。

中　期　の　対　応

状　況
・不登校初期の混乱から少し落ち着き、本人が動き出せるだけのエネルギーを蓄える時期。
・家庭における自分の居場所を見つけ、家庭での役割分担などを自主的、自発的に行えるようになる。

登校刺激
登校刺激は本人の気持ちを混乱させることがあるため、慎重に対処する。
・学習面や進路など本人の不安をよく聞き、安心感を与えるような言葉かけが必要である。
・家庭とは定期的に連絡をとり、家庭での状況や登校の意志などを確認する。

回 復 期 の 対 応

状　況
・動き出そうとするエネルギーがたまり活動をはじめようとする時期。
・学校のことや進路のことが気になり始め、まわりに少しずつ自分の思いを話しはじめる。

登校刺激
学校復帰に向けて少しずつ働きかけを行う。
・本人の意欲があれば、いつどういう形で登校を始めるか相談しながら進める。
・本人の登校しやすい時期、学校行事など本人自身が考え、決定し、行動することが大切である。
・教師や担任は暖かいまなざしで見守る。

不登校の定義

何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により登校しない、あるいは、したくともできない状況にあるために年間３０日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの　(文部科学省の定義)

不登校のサインSOS

①学校での様子
・ 休み明けの月曜日など、決まった日に欠席が多くなる。
・ 遅刻が増える。
・ 気分が悪いと言って保健室の利用が多くなる。
・ 学習意欲がなくなり、無気力になる。
・ 成績が急に下がり始める。
・ 学習用具等の忘れ物が多くなる。
・ 授業中、集中力に欠けトイレによく行ったりする。
・ 休み時間など一人でいることが多くなる。
・ 教師をさけ話をしなくなる。
・ 特定の教科がある日の欠席が多くなる。

②全体的な様子
・ 最近何となく表情が暗く、不安な様子である。
・ ちょっとしたことで、イライラしたり怒りっぽくなる。
・ 人から話しかけられても、うわのそらだったりする。
・ 一日の中で気分の変動が激しい。
・ 偏食がひどくなる。
・ 頭痛,腹痛,下痢,吐き気を訴える。
・ 朝、なかなか起きられない。

不登校対応における5つの視点

① 将来の社会的自立に向けた支援の視点
・不登校の解決の目標は、子どもたちの将来的な「社会的自立」である。
・不登校は「心の問題」のみならず「進路の問題」である。

② 連携ネットワークによる支援
・適切な支援と多様な学習の場を提供する(社会的自立にむけての進路の選択肢を広げる支援)ために、学校、地域、家庭で密接な連携をとることが重要である。

③ 将来の社会的自立のための学校教育の意義・役割
・義務教育段階の学校は、社会性の育成や生涯を通して学び続けるための学力を育てる学習支援の場として、重要な意義・役割がある。

④ 働きかけることや関わりを持つことの重要性
・必要としている支援を行わず、ただ待つだけでは状況の改善にならない。

⑤ 保護者の役割と家庭への支援
・時期を失することなく、生徒や家庭へ適切な働きかけを行う。
・気軽に相談できる窓口や保護者同士のネットワークづくりへの支援を行う。